

有度丘陵、根古屋層の崖

柴 正博



有度丘陵南側、根古屋から見られる根古屋層の崖の写真(左)とそのスケッチ(右)

有度丘陵（日本平）の駿河湾に面する南側斜面には、大きな崖がいくつもみられます。2年前の台風によって、有度丘陵の南側の崖のいくつかが崩れ、表面の植生が落下して、地層の露出が見られます。ここで紹介する地層は、国道150号線を静岡側から行くと、久能山下の信号の手前の柳沢川にかかる橋付近から、北側正面の崖に見ることが出来ます。その崖には、うすい茶色の砂層と濃い茶色の礫層、それと灰白色の2層の粘土質の泥層が見られます。その崖の最下部と最上部には、上の地層が崩れた土砂がつもった崖錐の堆積物が見られます。

有度丘陵の南崖で見られる地層は、根古屋層と久能山層で、それらは今から約30万年前から10数万年前に海や川の扇状地三角州（ファンデルタ）で堆積した地層です。泥層と砂礫層からなる根古屋層には、下から安居礫部層、古宿礫部層、中平松礫部層というファンデルタの前面や上面で堆積した礫層と、その沖合の海底斜面に堆積した泥層からなります。根古屋層の上には、やはりファンデルタの、おもに礫層からなる久能山層が重なります。

この崖で見られる下の泥層は、古宿礫部層のすぐ上に堆積した泥層で、上の泥層はその後に堆積した厚さ10mほどの泥層にあたります。この上の泥層の最下部に根古屋2（Ng-2）火山層がはさまれます。この泥層は水深200mより深い海底に堆積したもので、その下の砂礫層が堆積した水深50mほどの海底とは水深が異なることから、この泥層が堆積する直前に、海面が200mほど上昇したと考えられます。この層準で海面が200mほど上昇したことは、この上下の地層から産出する貝化石や有孔虫の化石などからも推定されています。また、この下の泥層も、古宿礫部層のファンデルタが堆積した直後にも、海面が上昇したことを示しています。このような地層の重なりは、根古屋付近の沢の中で観察されていますが、沢の中では地層が見られるところは狭く、また下から上まで全体を見通せることができないため、このような地層の色で地層の区別がはっきりと見ることが出来る崖は、近寄ることができなくてもとても重要です。